

言語学 Café

- ある兄妹の言語学談義 (5) -

宮下博幸・久保さやか

兄さん「の」ばか! の巻

いつものカフェ。妹は怖い顔をしてカフェに座っている。兄はいつものようにのんびりとカフェに入り、何かただならぬ雰囲気を感じながらも、妹に近づく。

兄:(平然と)お、また昆布茶飲んでるの?

妹:兄さんのばかっ!

兄:おまえ、来るなりなんで怒ってるんだ。

妹:このまえこのカフェでお金払い忘れたでしょう。さっき店の人に私が言われたのよ。あなたのお兄さんから先日お金をいただきませんでしたって。私、顔から火がでるほど恥ずかしかったじゃない。

兄:そんなに大声でまくし立てると、こっちが恥ずかしいよ。みんな見てるだろ、ほら。で、払っといってくれたよね?

妹:そりゃすぐ払っといいたけど、私の恥ずかしい思い、どうしてくれるの?これに対して償いをしてもらわないと気がすまない。今日はもちろんおごってよね。この昆布茶ももちろん。

兄:あー、うん。(話題を変えて)えーと、そうそう、そういえばお前さっき面白いこと言ったよな。「兄さんのばか」って。

妹:え、まあ(兄が話題を変えようとしていることに気づきつつも、関

心は「兄さんのばか」に移る。ちょっと考えて)。ほんとだ。よくよく考えると、なんか変な表現。そもそも兄さんのばか！の中の「の」ってなんだろう??普通の「の」とはぜんぜん違ってる気がする。そうそう、そういえばノルウェー語でも同じような場面に

(1) Din idiot!

って所有形容詞が使われるんだよね。ちなみに、これ英語では You idiot!になるよね...

兄:(うまく話題が変えられたことに内心ほくそえみつつ)お、そんな面白い現象があるのか、ノルウェー語では!何でそんな言い方するんだろうな、不思議だなあー。

妹:この言い方って「兄さんの変態!」とか「兄さんの石頭!」とか責めるときに限られるのかな。「兄さんの人格者!」って言えないし。でも「兄さんの偽善者!」なら言える。ってことはやっぱり責めるときしか言えないよね?「兄さんの天才!」これは現実だけにじゃなくて、言語的にも無理があるかも。「天才」とか「力持ち」とかのいい意味のときは、「兄さんの天才」や「兄さんの力持ち」じゃなくて「兄さんって天才、力持ち」みたいに「って」を使う。

兄:「って」はいい意味のときじゃなくても使えそうだな。「兄さんって変態」「兄さんって石頭」ってふうに。

妹:自分でよくわかっているじゃない。

兄:なに!

妹:それはそうとして、私がさっき言った「兄さんのばか」の「の」って何だろう?なんでこのとき「の」を使うんだろ。

兄:え、うーん。これは結構難題だな。でも今お前が言ったことからすると、「の」の後に現れる名詞は、とにかく否定的なのしりに使える名詞じゃないといけないうことがわかった。じゃ、まず「の」がどうして出てくるか考える前に、もうちょっとどんな制限があるか考えてみるか。「の」の後の名詞はいいとして、「の」の前の名詞にはどんな制限があるだろね。

妹：「お前のばか」っていうのはちょっとおかしい。「私のばかばか！」はよく少女マンガで見かけるけど、少し変則的な感じがするかな。「兄さんのばか」「花子のばか」なら大丈夫だけど。

兄：ってことは、「兄さん」「お母さん」のような呼びかけに使える親族名称や、固有名詞はオッケーってことだな。ほかにもあるかな。「のばか」で検索してみると、

(2) 世の中のばか・機械受注のばか・夏休みのばか・天気 of ばか・パソコンのばか

なんてのがあるね。これを総合すると「ばか」って呼びかけたい対象であれば何でもオッケーみたいだね。

妹：逆に言うと、呼びかけの対象にならない3人称代名詞的な「彼・彼女」や「あの人」は使えないってことかあ。「彼のばか」や「あの人のばか」って言うと、彼氏や旦那さんなんかの意味になってしまうよね。

兄：「彼」や「あの人」は呼びかけの対象として捉えられると、そんな解釈が前面にでてくるんだな。面白い現象だね。

妹：ところで、この言い方ってののしるときだけじゃなくて、「兄さんの石頭には何を言っても無駄」というふうにも使える。これって「石頭の兄さんには何を言っても無駄」とはどう違うんだろう？

兄：検索でも同じようなのがあった。トルストイの民話の「イワンのばか」は有名だよな。これは翻訳タイトル of のとき¹は「イワンのばか」だけど、この話 of のあらすじを紹介するときは次のようになっている。

(3) むかしある裕福な百姓に三人 of の息子があつた。軍人 of のセミヨンと、ほてい腹 of のタラスンと、ばか of のイワンとそれにマラーニャといううまれつきおし of の娘がいた。

¹ 早稲田大学文学部助手 of の鈴木健司さんに調べてもらったところ、原題は「Сказка об Иване-дураке и его двух братьях」で、「イワン」と「ばか」は同格構造にある of のこと。

これを「イワンのばか」に置き換えてみると

(3') むかしある裕福な百姓に三人の息子があつた。軍人のセミ
ヨーンと、ほてい腹のタラスンと、イワンのばかとそれに
マラーニヤというまれつきおしの娘がいた。

妹 : (3) の「ばかのイワン」だと、イワンの性質が「ばか」であるこ
とを客観的に語っている感じがするけど、(3') のほうは、三人
の息子の中でイワンだけは語り手と個人的に関わりがあつて、語り
手のイワンに対する感情が入っている感じがする。「兄さんの石頭
には何を言っても無駄」は、実際に兄さんの頑固さにさんざん悩ま
されている私の訴えが込められた表現だつて言えるよね。

兄 : この二つを比べると、おそらく「石頭の兄さん」型の方が生産的だ
ね。例えば「大学教授の山田氏が講演した」は言えるけど「山田氏
の大学教授が講演した」は言えない。「兄さんの石頭」型は、のの
しる場合にオクケーな組み合わせだけで出てこれるみたい。とす
ると、これは本来ののしる場合に使われる表現が、全体が名詞句だ
ということで、人物の描写の際にも拡大して使われるようになったケ
ースなんじゃないかな。おまえが「兄さんの石頭」に対して「訴え」
みたいなのを読み取るのも、背後にののしるような場面が想定され
て、そういうイメージがそういう描写の際にもブレンドされて読み
込まれるからだろ。

妹 : ってことは「兄さんの石頭には」のような言い方は、場面に結びつ
いたののしり表現からの派生だつてこと？

兄 : そうじゃないかな、きっと。難しく言えば談話的機能の領域から、
テキスト的機能、または叙述機能の領域への転用が行われたつてこ
と。こういうフレキシブルなところが言葉の面白いところだよな。
さて、ここらでいままでの考察を総合すると、問題の言い方は「名
詞 1 + の + 名詞 2」という構文になっていて、このうち名詞 2 = の
のしりの名詞、名詞 1 は主に人称代名詞以外の、ののしられる対象

が現れる。そしてこの構文全体で名詞1に向けられたののしり行為を果たす機能を担っていると言えそうだね。ちなみに「名詞1 + っ + 名詞2」は誰かに向けられているというより、話者の感慨をあらわす感じがするね。そしてこの場合の名詞1と名詞2は「の」の場合に比べて、制限が少ない。

妹：そうだね。

兄：この構文の性質を、似ている表現と比較してもうちょっと考えてみようか。この構文にはののしられる相手と、ののしりとして使われる名詞が現れるよね。ではこのような二つの要素があらわれる言い方には、ほかにどんなのがあるだろう。

妹：そういう表現は任せて。兄さん相手に熟知しているから。少なくとも3つはあるよ。

(4) 「兄さんの嘘つき！」

(5) 「兄さんは嘘つき！」

(6) 「兄さん、嘘つき！」

あと要素はひとつしか現れないけど

(7) 「嘘つき！」

ってものある。(5)の「兄さんは嘘つき」は(4)の「兄さんの嘘つき」より普段から嘘つきな感じがする。(4)はそれに対して、何かそのときの出来事に関してのみ言ってる。前者は叙述文なのに対して、後者は非難のせりふとして慣用化してしまってるせいなのかな。

兄：そうだね。(4)は(4')のように「だ」を加えても文にできないけど、(5)は(5')のように「だ」を加えて文にすることができる。

(4') *兄さんの嘘つきだ

(5') 兄さんは嘘つきだ

(4)の言い方はしたがって文とは結びついていなくて、そもそも名詞的な呼びかけ表現なのだろうね。呼びかけだから、もちろんそれは発話したそのときにその発言が有効になるという、行為遂行的な発話だ。あと(5)が普段から嘘つきな感じがするのは、文の中に現れる「は」の一般的な機能のせいだろうな。それじゃ、「兄さんの嘘つき」と残りの「兄さん、嘘つき」と「嘘つき」にはどんな違いがある？

妹：「兄さんの嘘つき」には、兄さんが嘘つき呼ばわりされる特定の案件が一つ強く結びついている感じがするけど、他の二つは必ずしもそういうわけではなさそう。例えば、おごってくれる約束を破った兄さんに対しては、「兄さんの嘘つき！」と言いたくなるけど、兄さんが単に「太陽は西から昇って東に落ちるんだよ。」なんて嘘をついたときは、「兄さん、嘘つき！」か「嘘つき！」かな。そこであえて「兄さんの嘘つき！」と返した場合、兄のほら話を信じ、それを他人に話して恥ずかしい目に遭った、という経緯がありそう。

兄：「の」が出てくるときの案件との結びつきは、非難やののしりのような、相手に対する強い訴えの機能が伝達されるときに特有だよな。非難やののしりが行われるときは、ふつうその非難やののしりを引き起こした原因が話し手と聞き手の関心になる。「の」が出てくる場合も全体が非難やののしりの形式として成立しているから、そういうニュアンスが出てくるんじゃないかな。それに対して、「嘘つき！」なんかでは、言い方にもよるけどそれ自体はそういう機能と結びついていないので、明らかな嘘に対して軽く返すときなんかにも使える。あと「の」に着目するなら、「の」が入っているとほかのののしる相手と比べてののしる相手が特定されていて、ののしりがほかでもなくその相手に向いていることをはっきりさせている気がする。つまりののしる相手をはっきりとイメージして、その相手を「の」で捉えて、そのあとにその相手に対してののしっているような感じがするな。

妹：恨みをもっているような感じはそのあたりから出てきているのかな。
兄：そうかもね。さて、ここで問題の「～の～」は構文化していて、ののしり相手とののしり言葉を自由に入れることができ、またそれは構文全体で非難・ののしりの機能とセットになっている、ってことで説明を終わりにしてしまうこともできるけど、これではお前の「なんで「の」が出てくるの」という質問の答えにはまだなっていないかな。これは難問だけど、ここまですぐ構文の性質がだいたいわかったから、これについてもちょっとばかり考察してみるか。まずは考察に当たっての仮説として、この「の」も他の「の」の用法と何らかの関連があると思うのが妥当だろうな。したがって他の「の」についてもうちちょっと知りたいな。で、「の」にはどんな用法があるの？

妹：兄さんのほかか、まためんどくさい仕事を押し付ける！

兄：単に「知りたい」という願望を述べただけで、だれもやれとはいってないよ。おまえが勝手に発話行為を読みとってるだけなんだから、「押し付ける」と解釈されるのは心外だな。

妹：兄さんの日ごろの行動が問題なの。日ごろの高圧的な態度からすると、この哀れな妹に押し付ける以外の解釈はないでしょ。

兄：まあとにかく、よろしく。

妹：やっぱり押し付けじゃない。まあ興味をもったのでいいけど。えーと、「の」の用法はというと…。大きく分けると連体修飾語を作る場合と、従属句の主格・対象語格を表す場合があるみたい。『大辞林』（第二版、三省堂、<http://dictionary.goo.ne.jp/>）を参考にしてまとめてみると、連体修飾語を作る場合には

(6) 連体修飾語を作る。

(ア) 後続する名詞との所有・所在・所属・行為者などの関係を表す。

「私の本」「空の星」「学校の先生」「偉人の業績」

(イ) 性質・状態・材料などを表して下に続ける。

「花の都」「紫の糸」「急の話」

(ウ) 人間・数量・位置・論理などについての関係を表す。

「社会悪の問題」「大臣の身边」

(工)同格の関係を表す。

(a)「政治家の山下氏」 (b)「ビールの冷やしたの」

(オ)動作性名詞に付いて、その動作・作用の主が後ろの名詞であることを表す。

「操業中の漁船」「ご賛成の方」

(カ)後ろの動作性名詞が表す動作・作用の主体・対象であることを表す。

「彼の援助で助かる」「酒の飲みたさをこらえる」

(キ)「ごとし」「ようだ」「こと」などを続いて言って、実質・内容を表す。

「リンゴのように赤い」「よって件(くだん)のごとし」

の7つが挙がっていて、従属句の場合には

(7)従属句の主格・対象語格を表す。

「ぼくの読んだ本」「お酒の飲みたい人」

のような用法があるってことになる。

兄：調査結果を見ると、はっきりと問題の「の」だって言えるのではないみたいだな。やっぱりちょっと特殊な「の」ってことか。でもなんとなく似ているのはあるね。

妹：(6工)の同格の「政治家の山本氏」はさっきの「ばかのイワン」と同じ用法で、ちょっと似ているね。ここで問題になっているのは呼びかける相手が「の」の前に来る表現だから、その点で違ってるけど。「山本氏の政治家」なら同じになるけど、これはおかしい。

兄：じゃあ名詞を逆にするんじゃなくて、今度は「政治家の」は固定して比較してみよう。「政治家の山本氏」と「政治家のばか！」がいかな。どんな違いがある？

妹：「政治家の山本氏」は政治家である山本氏ってことで、山本氏についてどんな職業かという点から説明を加えていて、山本氏の特徴を

述べてる。また感情的なニュアンスは読み取れない。「政治家のばか！」の方は、それに対して相手に対する非難の感情が読み取れるし、それに兄さんもさっき言ったかもしれないけど、政治家を頭の中で取り立てて、それについて「ばか」とその性質を述べるような感じを受けるかな。

兄：うん。問題の「の」にそういう機能があるんだとすると、あとはこの「の」が他の「の」の用法とどのようにかわるかが問題ってことだ。ここでちょっと理論的なことを考えてみよう。まず「の」で表される関係には、さっきも確認したとおり、普通は二つの要素が現れる。もちろん「私の」みたいな言い方もあるけど。これを(8)のように表すことにしよう。このふたつの要素が「の」によってなんらかの関係で結び付けられるってことになる。ちなみに前の「の」はここでは「の」の前の要素で、後ろの「の」は「の」の後ろの要素を表している。

(8) -

じゃ、ここでお前の調べた例に基づいて、「の」にはどんな関係があるのかを考えてみよう。まず(6ア)の「私の本」「空の星」なんかだけど、こういった例の共通性を考えてみると、この場合には後の要素が最初の要素の領域に何らかの形で含まれているとみなされているね。つまり全体・部分関係かな。ここにはまず全体を捉えて、そこから部分へと進んでいくっていう見方がある様子。これは Langacker さんなんかのいう、参照点構造ってやつだね。この全体・部分関係を「>」で表すとすると

(9) >

ってことになるかな。(6イ)の「花の都」「紫の糸」はこれとは様子が違う。ここでは(9)のような全体・部分関係は表されない。「花」や「紫」は単に「都」や「糸」の属性だよ。つま

り「の」によってこれらの名詞が属性表現に変わっているといえる。これをどう表すか難しいけど、後ろの名詞が中心になっていて、「花」や「紫」のような属性は「都」や「糸」のある種の部分だと考えるなら、(9)とは逆に

(1 0) <

と表せるかもしれない。これらを入れ替えて「都の花」「糸の紫」にすると、再び(9)によるになるね。辞書の(6ウ)はこの(9) (1 0)両方の場合がありそうだし、(6エ)の同格の場合は(1 0)のグループだといえるかな。政治家であることは山本氏の属性だと考えられるとするなら。あと辞書の例には動作性名詞がかかわる場合もあがっているけど、これはとりあえず考えないとすれば、「の」の表す抽象的な関係は大まかに言って上のふたつということになる。さて問題の「兄さんのばか」の場合だけど、ここでは「兄さん」が取り立てられるって構造がある。とすると(9)の全体から部分へというのと完全には同じではないけど、まずあるものをイメージして、そこから次の要素へと移行するというプロセスがあるという点では(9)と近いかな。この(9)との類似性はとても抽象的だけど、(6エ)の同格のもう一つの例の「ビールの冷やしたの」に見られる関係とは、より具体的な近さがあるかもしれない。これは同格に分類されているけど、「政治家の山本氏」とは違って、まず「ビール」を取り上げて、それについて「冷やしたの」と述べるという構造だから(9)の構造だよ。この「ビールの冷やしたの」と「冷やしたビール」を比べてみると、ここでも対象を「の」の前に出して取り立てているって感じがよくわかるね。このような「の」の取り立ての働きが「兄さんのばか」の場合にも出現しているって考えられるんじゃない。この働きは「兄さんのばか」のような表出のときにちょうどいい機能なので、この構文に取り入れられたってということ。

妹：うん、そう考えると他の「の」の用法と関連づけられるね。

兄：ノルウェー語の所有形容詞の場合にも似たことがおこるのは最終的にはなぜかわからないけど、「の」に似た機能をもつ形式がののしりの際に同じように取立てと関わることで出現するってことは考えられるよね。まったくの想像だけど。

妹：ノルウェー語では所有形容詞が名詞の前と後ろに出てこれるってこととも関係しているのかな。とにかく、変わった言い方でも、同じ形が使われているとやっぱり他の用法となんらかの関連があるんだね。

兄：今言ったこと以外にも、他にいろいろな関連が考えられるかもしれないけどね。

妹：さて、だいたい問題が解決したところで、それじゃあ、今日は兄さんの奢りだから...あ、すいませーん、このスペシャルチョコレートパフェと、あとホットケーキとアイスカフェラテ。それとお土産に特製チーズケーキを3つくださーい。

兄：あ、財布忘れた。

妹：え！？冗談でしょ？

兄：いや、ほんと。

妹：んんんもう、兄さんのばか！ううん、兄さん「は」ばか！！

(みやした ひろゆき・くぼ さやか)

MIYASHITA, Hiroyuki / Sayaka KUBO. *Linguistic Café* (5).